



# 【“まちづくり”を考える情報誌「おっ!!まっちい〜」100号記念に寄せて】 “群馬流”のまちづくりのバイブルとなることを祈念して

帝京大学経済学部観光経営学科長 教授 大下 茂

創刊から16年の歳月を経て、100号の記念すべき発行を迎えられましたことにお祝い申し上げます。

100号、それは数字としての意味以外に、『百』と記述することで、“多くのもの”の意味を持ち合わせています。百貨店、百獣、百科事典や百人一首等、100を超えるものを代表する言葉として『百』が使われています。“まちづくり”を考える情報誌「おっ!!まっちい〜」の“百号”には、これまでにまちづくり関連の県内外の多くの情報が掲載され、それをヒントや手掛かりとして新たな取り組みへと発展する源となってきたと思われます。

掲載記事を辿ると、適時性のあるまちづくり情報やまちづくりに先行的に取り組んでいる地域の情報と、群馬県発信の地域ならではの情報を、群馬県に軸足を置いて編集されてきたことに意味と意義があります。志をもってまちづくりに取り組む者にとって、前者は“風”の情報を、後者は“土”の情報をもたらし、地域の中でのまちづくりの熱意が重なることで、21世紀の県土の新しい“風土”を形づくりつつあることに貢献しています。

2004.7の24号に『桐生新町まちづくり展』でのまちづくり講演会の紹介をいただいた後、『魅力あるまちづくりパートナーネットワーク講座』の講師の用命を賜ることとなりました。また、79号(2013.9)からは、小職のゼミ生が寄稿する「観光まちづくり最前線」に誌面をさいてくださり、これまで4代のゼミ生が襍がけでの執筆リレーを行い12回の寄稿をさせていただく等、群馬県まちづくり活動の応援団となる機会をいただきました。

日本のみならず世界的にも内発による自国・自地域の活力を高める方向に向きつつあります。このような時流の中、本誌が地域内外の情報を群馬県ならではの視点から切り込む『群馬流(style)のまちづくりの情報誌』のバイブルとなり、群馬県のまちづくりが百花繚乱の活動へと発展することを祈念いたしております。

**東 毛** 交流はまちを磨き、人を磨く。まちづくり展 桐生新町 まらづくり展

「交流はまちを磨き、人を磨く〜まちの活かし方〜」と題して、大下(おおした)先生により面白い話が聞けました。

「交流」とまちづくりをテーマに「まちづくり講演会」開催!

今日、桐生市有明館の会議室、酒蔵、味噌蔵油蔵で、「桐生新町まちづくり展」が行われました。6月16日から始まったこの展覧会も、27日の「まちづくり講演会」での、基調講演が「おっ!!まっちい〜」の「本→本2号まちづくりの巻」による「まちづくりの発展」です。そして、参加者による交流の場も入りました。基調講演では、これからは「集産」ではなく、「交流」が大切だと言っていました。歴史的に見ても、「人、モノ、情報の集積を来しは地場を活かすまで」と言う事からです。「交流」をこの3つの軸がある、とも言っていました。「人的集積」「物的集積」「情報の集積」この3つを軸とするために交流人口を増やし、地域の活性化を図りたい。近き者説(よさこ)は、遠き者来る・・・住んでいる人自身が楽しんでいながら興味が、まちづくりの基本です。

「ミスターまちづくりマン」二人揃って、参上!

この二人こそが、「ミスターまちづくりマン」そのひとです。左から永上勉が「おっ!!まっちい〜」の副編集長、右側が桐生市の「本→本2号まちづくりの巻」の編集長です。

本町一丁目・二丁目の街並み  
これが、う、あの懐かしい本町一丁目・二丁目のメインの通りです。なかなか懐かくなる建物があるんです。よ、これらの建物を残しながら、まちづくりができるのが、知恵をしようしています。

まちづくり展の様子  
「まちづくり展」の展示会場です。群馬大学工学部、足利工業大学工学部、桐生短期大学、桐生工業高校の協力により出張されています。学生さんにも、なかなか見えないですね。

こんな物を見つけました  
本町通りを自分目で探検してみました。こんな面白いものを見つけました。すぐに目録から録り、シャッターを押してみました。これに乗ってアーノーツリウム とうですか。

○ お問い合わせ先  
桐生市都市計画課まちづくり推進係 0277-46-1111  
県都市計画課まちづくり推進グループ 027-226-3663



2年目のパートナーネットワーク講座(2005年度)、榛名町杜家町の体育館にて。翌朝、前日の飲み残しのコーヒーが凍っていました。

まっちいデビューとなった24号(2004.7)、『桐生新町まちづくり展(まちづくり講演会)』の紹介記事

